事例４：中学３年生　信頼感を育てるかかわりで，保健室登校をするようになったＤ男

中学１年の３学期，信頼していた友人に裏切りと思われるような言葉を掛けられたＤ男は，人を信じられなくなり，不登校を始めた。中学２年では，一時相談室登校をしたが，継続できず，不登校が続いた。中学３年の担任の紹介で，７月から教育センターの援助が始まった。高校進学を目標に，９月からは保健室登校をするようになり，登校したときは同級生と話をしたり，一緒に下校したりして，友達に対する信頼感が徐々に回復されてきた。そして，教室での学習は十分にできなかったが，同級生と一緒に卒業式を迎えることができた。

周辺の状況

両親とＤ男，妹の４人暮らし。父親は単身赴任が多かった。母親は，男の子には躾を厳しくしなければならないとの思いが強く，身の回りの整理やあいさつなど一つ一つに口うるさく言ってきた。また成績にも厳しく，母親の思うような成績をとれないと叱責することがあった。しかし，女の子は伸び伸びと育てようと思っていたので，妹の行動には寛大であった。

母親は，Ｄ男の不登校が始まるまでは，思うとおりの子育てができたと思っていたが，不登校が始まってから子育てに対する自信が揺らぎ，Ｄ男へのかかわりが不安定で拒否的な態度になった。またＤ男は，そのような母親に対して不信感が強い状態だった。

生徒理解

Ｄ男は，母親の態度が妹と自分に対して違うことを不公平に感じていた。しかし，母親に愛されるために，母親の言うことに従い，成績も上位で頑張ってきた。母親や周囲の人にいい子であると思われていることを心の支えとして過ごしていた。

ところが，信頼していた友達に「Ｄ男は，まじめ過ぎる，だから嫌いだ」と言われ，自分の支えとしているいい子のイメージが傷付き，裏切られたと感じた。友達に対する不信感が，周囲の人々に対する不信感へと広がり，安心して学校で過ごせなくなったととらえられる。

指導・援助の方針

※（セ）は，県総合教育センターの援助　（学）は，学校での指導・援助

1　担当者との信頼関係を深めることで，対人不安を和らげる。（セ）
2　母親に対する不満を言語化させ，母親との関係を改善する。（セ）
3　学校の中で信頼できる担任を窓口に，居場所の確保をする。（学）
4　将来に希望がもてる進路指導で不安感を軽減する。（学）
5　サポートチームを組織し，学級への誘い掛けをする。（学）

＜指導・援助の経過＞

1　信頼関係の確立

友人とのトラブルによって，人を信じることができなくなった経過を配慮し，教育センターでは担当者とＤ男が十分信頼関係で結ばれるよう配慮した。

プレイルームでの活動は，Ｄ男が希望する卓球を中心に活動した。長く打ち合いを続ける方法について話し合い，Ｄ男に目標を決めさせ２人で取り組んだ。相互に，打ちやすいように返球をし，自然に信頼関係ができてきた。また，Ｄ男が絵を描くことが好きだったので，絵を描く活動やジグソーパズルづくりを取り入れた。Ｄ男は，無言で一生懸命取り組み，達成感を感じたようだ。担当者は，あえて言葉掛けをせず，その活動を見守ることでＤ男との共感性を高めるようにした。

このようなＤ男の興味のある活動を通じて，相互の信頼関係を徐々に確立していった。

2　母親との関係の改善

担当者との信頼関係が深まってくると，Ｄ男は徐々に母親に対する不満を漏らし始めた。「お母さんは，妹ばっかり可愛がっている」，「いつもがみがみ怒ってばかりで，とってもうるさい」など，これまで言えなかったことを表出し始めた。また，「お父さんは，自分と遊んでくれて好きだったのに，仕事でいないから寂しい」と父親がいないことで家庭の中に居場所が見付けられないようだった。

Ｄ男の不満を否定することなく聴き，感情を表出させるとともに，母親との楽しかったことに焦点を当て思い出させるようにした。Ｄ男は，徐々に，楽しかったイメージを膨らませ，母親

＜ポイント＞

①　不登校になっている子どもは，対人関係に自信を失っていることが多い。特に人の目を極端に気にしたり，人と会うことにストレスを感じたりする場合は，対人場面での成功経験を通して自己効力感を実感できるようにさせることが大事である。

Ｄ男については，担当者との活動をとおして，相互の信頼関係が築けたことで対人関係における自己効力感を実感させることができた。

＊　自己効力感

A.バンデューラが提唱した概念で，人が何かを行うときに，そのことをある程度やれると感じることを指す。対人関係では，自分が友達や先生などと緊張せずに話をすることができそうだという感覚などがこれに当たる。

②　子どもの不登校を頭では理解しても，それを受け入れることができない保護者は多い。そこで，登校を強要したり，厳しく叱責したりする保護者との間で，ますます親子関係が崩れることがある。他者が，子どもの親に対する不満をありのままに聴くことで，子どもは冷静に親子関係を見つめられるようになる。

Ｄ男については，担当者がＤ男の言うことを否定せずに聴いたことで，ストレス発散を図ることができ，心理的に安定したことが，母親との関係改善につながった。

に対する見方を変え始めた。また，母親もＤ男の気持を受容したかかわりをすることによって，「まじめでいなければ愛してもらえない」というＤ男の気持が軽減されてきた。

3　無理なく登校できる居場所の確保

Ｄ男が，人の目を気にしている状況があったため，教室での学習は難しいと思われた。担任と養護教諭は，教室以外の場所に居場所を確保する必要性を感じ，受け入れられる場所について検討した。そのことを管理職に報告して了承してもらい，他の教職員にも職員朝会で共通理解を図った。

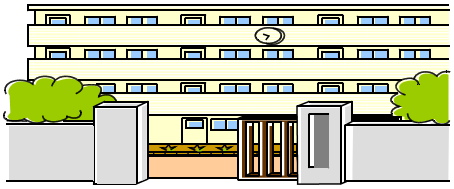
そこで，担任が家庭訪問を行い，Ｄ男に保健室への誘い掛けをした。登校時刻も始業時刻に限定せず，Ｄ男のペースに任せることも話した。また，図書室や相談室も利用できることを話し，選択肢を増やした。Ｄ男の表情が曇っていたので，「無理をしなくていいよ」と言葉掛けをして決定はＤ男に委ねて帰った。

Ｄ男がいつ登校してもいいように，養護教諭や司書や心の教室相談員とも十分打ち合わせしておき待つようにした。

数日後，Ｄ男は母親に送ってもらい，自ら保健室に登校してきた。

4　進路についての不安軽減

Ｄ男は，不登校が１年以上になっており，学力や進路に対する不安も大きかった。Ｄ男の将来の夢や目標も漠然としていた。担任は，Ｄ男から得意なことを話を中心に聴き，将来の夢のイメージを膨らませるようにした。Ｄ男は，大学への進学の夢をもっていた。そこで，担任は普通科の高校進学を前提とした，進路指導を繰り返した。また，保健室等で無理のない程度の学習や進路指導も行った。



③　保健室等への登校は，子どもが課題解決をするための第一歩である。家から保健室等までと，保健室等から教室までの心理的距離は，それぞれの子どもの状況によって異なる。保健室等へは登校できても，そこから教室になかなか進めない子どもも多い。しかし，まず保健室等へ誘い掛けることで，次の段階へと進むことができる。

Ｄ男については，保健室への誘い掛けをして，しばらく待っていたことでＤ男の気持ちの整理ができ，保健室への登校に挑戦してみようという気持ちが高まった。

④　中学３年は，高校への橋渡しの学年であり進路については，大きな不安を誰しももっている。不登校が長期化すると授業を受けられないことで，進路に対する不安感が大きくなる。不登校の子どもたちの夢やその達成方法を十分イメージ化させる必要がある。そして，その夢に対して希望をもたせ，現実的な問題として学力をどのように補充するか，子どもに考えさせ学習に挑戦しようとする気持ちを高めるようにすることが大事である。

Ｄ男については，進学目標をイメージ化し，現実の学力についてみつめさせることによって，学習の意識付けができた。

5　学校と教育センター，教職員間の連携

担当者と担任は必要に応じて連絡を取り，教育センターでの様子や進路に関する希望等について情報を交換してきた。保健室登校するようになった２学期以降，担任は学校内でＤ男と直接かかわる職員と情報交換を密に行った。そしてその情報を教育センターへ報告した。「Ｄ男の進路についての考えをよく聴き，不安感を軽減することが必要である」との助言から，その時々で，対応する職員がＤ男の話をよく聴くように共通理解し実践した。３学期になって教室での学習も１週間に１回程度はできるようになった。高校の学力検査も受検し，同級生と一緒に卒業することができた。

⑤　相談機関等に保護者が相談に行った場合，相互に連携を図ることで，子どもの問題等の改善に効果を発揮することが多い。また，相談機関等に保護者が行くことに抵抗がある場合は，学校関係者が相談機関等に来所したり電話をしたりしてプライバシーに配慮した情報提供をしより適切な子どもへの対応ができるようにする必要がある。相談機関等は，忙しく学校から連絡するのは迷惑ではないかと考え，遠慮することがあるようだが，相談機関等も連携の必要性を感じているのでかえって喜ばれる場合が多い。

Ｄ男については，学校と教育センターの連携がよくなされ，Ｄ男の状況に合った対応が実践できたことが改善につながった。

Ｄ男の変容

1　保健室への登校から，場合によっては図書室，相談室と別の部屋でも過ごすことができるようになり，欠席が減少した。

2　高校進学をあきらめかけたが，担任との相談やプリントによる個別学習を通して高校進学を果たした。Ｄ男は高校でも欠席がちであるが，前向きに努力している。

その後の対応

1　担任は，Ｄ男の入学する高等学校に行き，教頭と生徒指導係に会った。そして，Ｄ男の中学校での欠席状況や，学校におけるＤ男の状況，友人関係などの情報提供をした。そこで，クラス編成や担任及びＤ男の状況によって保健室等登校などの配慮について依頼した。

2　Ｄ男の入学後，中学校の担任は，高等学校の担任に電話で，Ｄ男への配慮を依頼し様子を聞いた。

主なポイントの応用

ポイント①　信頼感の回復

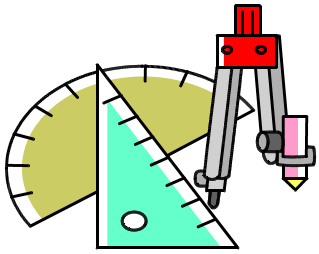
いじめや友人とのトラブルがきっかけとなって，人に対する信頼感をなくす子どもたちが多い。そのときに，「自分は，人に嫌われるような性格なんだ」，「自分は，かっこよくないから嫌われるんだ」など，自己否定することがみられる。自己否定すると他者に対する見方も否定的となり，他者の行動に嫌悪感さえもつようになる。

信頼感の回復のためには，子どもの最も信頼する他者が，子どものうまくいっている部分，（例えば同年齢の子どもとはうまく対応できなくても，年下の子どもや老人には上手につきあえる）に焦点を当て自信付けを行い，徐々にうまくいっていない部分の自己評価を肯定的な見方に変えていく必要がある。そのようにして，肯定的な自己評価ができるようになると他者に対する見方も肯定的となってくる。

子どもにとって最も信頼できる人が誰であるのかを考え，その人を中心に信頼感の回復を行い，徐々に信頼できる人の輪を広げていく計画的な援助の在り方が大事である。

ポイント④　進路指導の重要性

- 中学校は，義務教育の最終段階として進路指導の重要な責任を負っている。不登校や保健室等登校の生徒の中には，将来を考え，やり直して頑張ってみようと思っている生徒もいるので，諦めずに進路指導を行うことが大事である。
- 不登校や保健室等登校の期間が長くなると，学習に対する不安が高まり，そのことで進路への希望を失ってしまう生徒も出てくる。その際，学力だけで進路は決められるのではなく，進路は多種多様に考えられることを伝え，多様な情報を提供することによって進路への希望をもたせるようにすることが大事である。
- 不登校や保健室等登校だったことで，進路が絶たれるようなことがないように，社会的な自立を目指して支援することが大事である。

ポイント⑤　相談機関等との連携

- 学校に登校できなくても，相談機関等であれば行けるという生徒もいる。最初は気乗りがしなくても継続して相談を繰り返しているうちに，自己の課題に気付き，その解決に取り組むことができるようになる。
  「あの保護者は行かないだろう」，「あの子は話をしないだろう」などと思わず積極的に相談機関を紹介することが大事である。